●空間コードの働きを考えよう

場所に「らしさ」を生み出す空間コードの働きを意識化するために、しばしば、「もしそのコードがなかったら?」という仮定が役立ちます。

たとえば、中川運河に閘門がなかったら、どんな姿をしていたでしょうか。ゼロメートル地帯に掘られた中川運河で閘門をなくそうと思えば、両岸を高い堤防で守られた天井川のような構造になってしまうでしょう。

もう少し現実的な比較対象として、同じ名古屋の堀川を取り上げてみましょう。

堀川は、近世初めに名古屋城付近から熱田湊に至る台地の西縁に沿って開削されました。現在の猿投橋から河口までは傾斜がほとんどなく、潮の干満の影響を受けて水位が大きく変化します。つまり、台地の縁を掘り下げることで、港から自然に水が出入りする水路が造られたわけです。このため都心付近では、堀川の水面と両側を走る道路、とくに東側の道との間に平均して5mほどの高低差があります。

再整備後の納屋橋エリアでは、川沿いの散歩道に面して飲食店が開かれ、高い護岸上に設けられたテラスから下に水面を見ることができます（下写真）。水位一定で水面のすぐ上に倉庫などが立ち上がる中川運河は、堀川とは異なる雰囲気をもつことに注目しましょう。

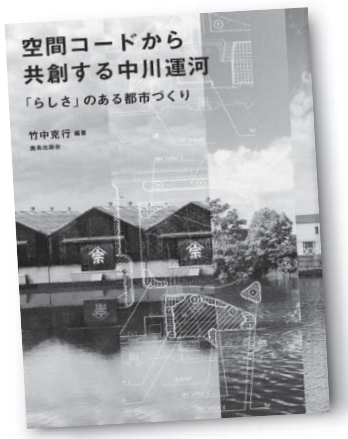
名古屋の都心を流れる堀川（天王崎橋から納屋橋方面をのぞむ）

絵で見て考える中川運河の「らしさ」

都市の「らしさ」は、直感的にはわかっても、言葉にしにくいものです。視界に収まらないスケールの大きな特徴、目前にあっても気づきにくいリズム、意識化されていない付き合いの作法など。

そうした言語化しにくい町の底流をつくる脈を可視化するために、『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』と題する本シリーズを制作しました。

絵からヒントを得ながら、未来の都市づくりのために想像力を働かせましょう。



『空間コードから共創する中川運河』
鹿島出版会（2016年）
ISBN：978-4306073203、2,500円+税

中川運河の空間コード

- A1　海に向かう都市の層
- A2　閘門式運河の水面（2018/03既刊）
- A3　人工の自然堤防
- A4　緑のコリドー
- B1　運河を挟んで向き合う
- B2　インダストリアル空間
- B3　鳥と風が運ぶ都市の緑
- B4　連続体の美学
- C1　名古屋の大静脈
- C2　インタラクトする水土
- C3　「自然」とのつきあい
- C4　創造力の空間

『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』A2、2018年3月　制作・頒布：都市コミュニケーション研究所（riuc.takenaka-lab.net）
代表：竹中克行（愛知県立大学教授）、イラストレーション：クレメンス・メッツラー、解説・写真：竹中克行／内山志保

2018年3月発行

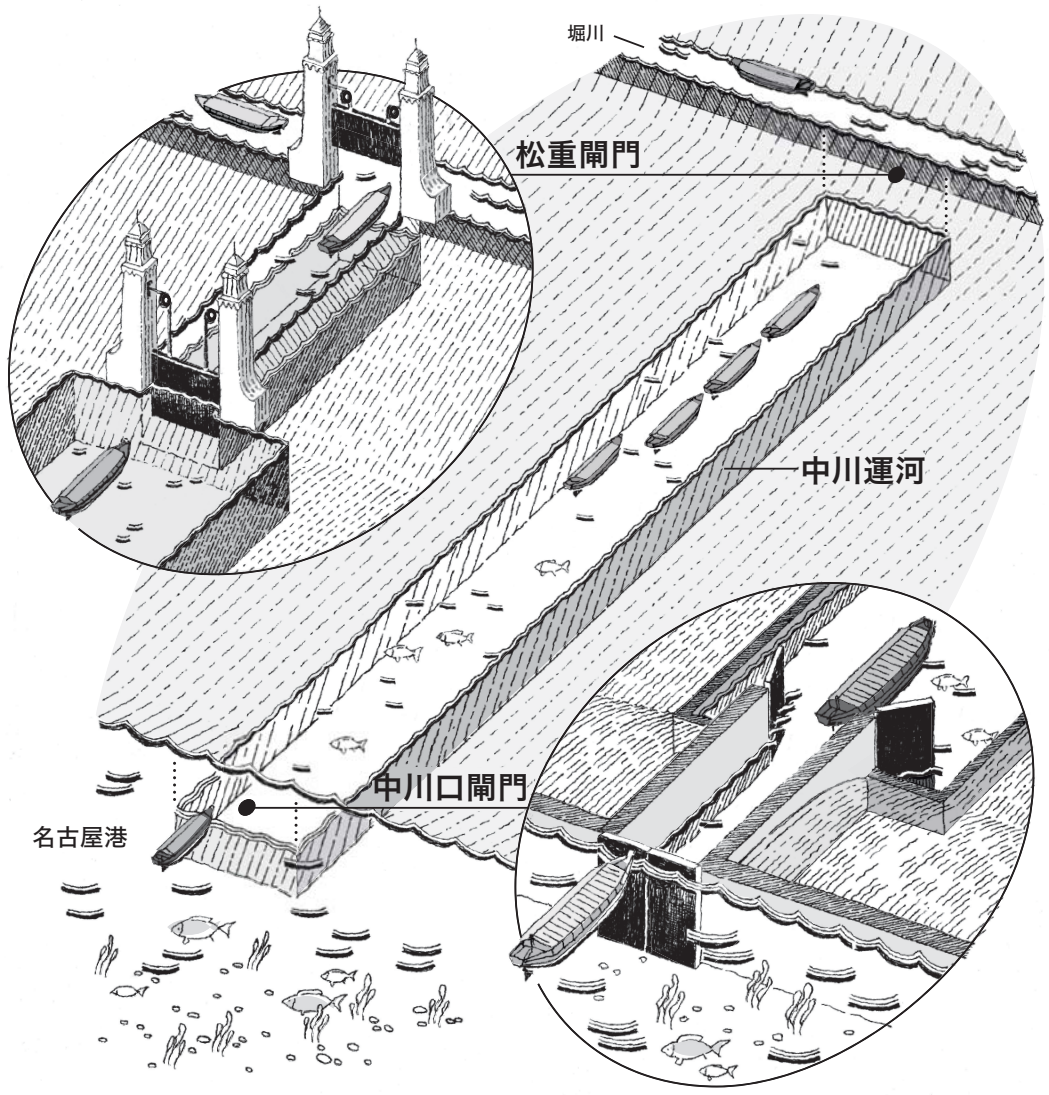
絵で見て考える中川運河の「らしさ」

中川運河の空間コード **A2**

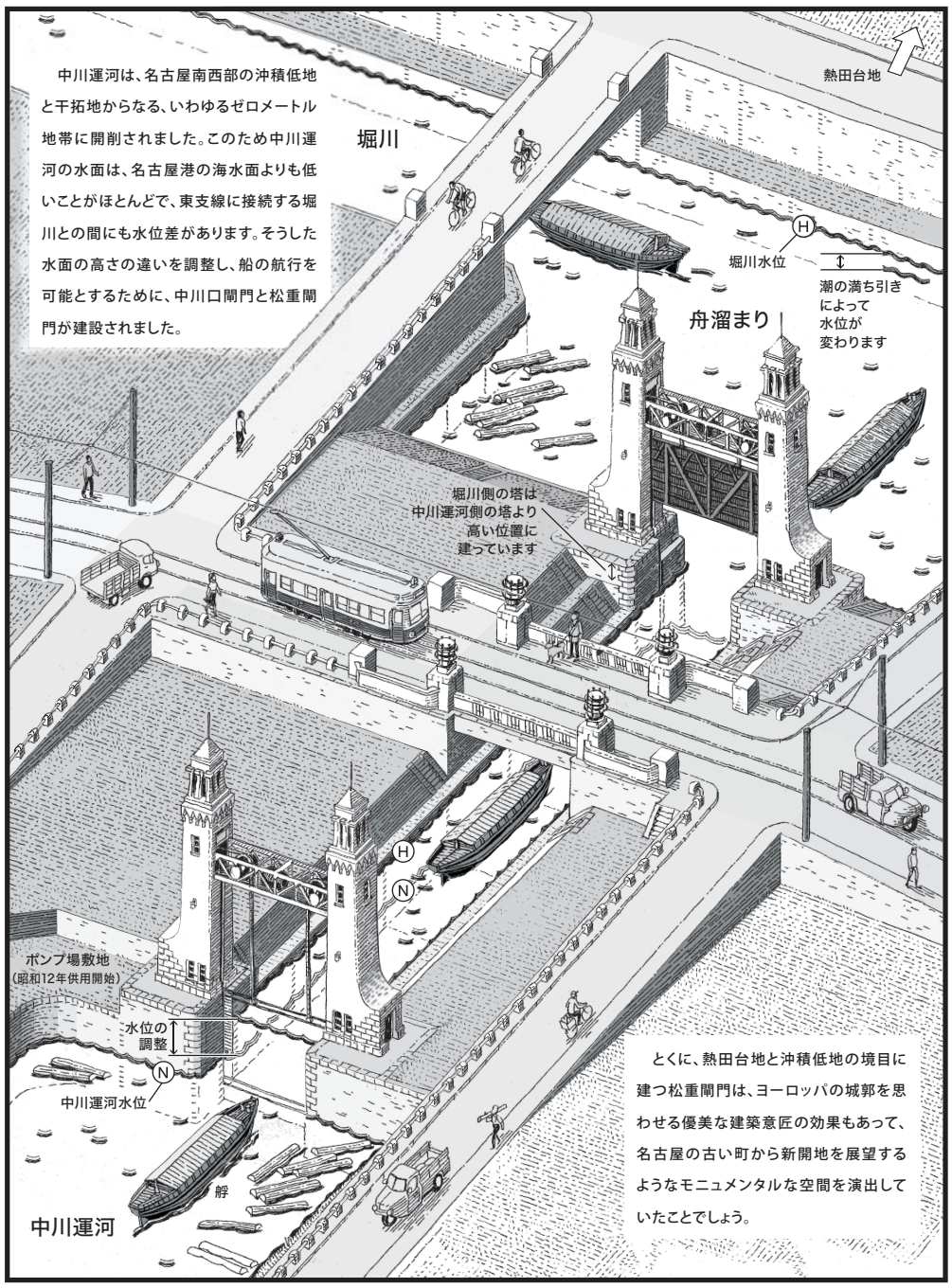
閘門式運河の水面

土木が生んだ水と空気の邂逅

❶両閘門式で掘り込まれた運河

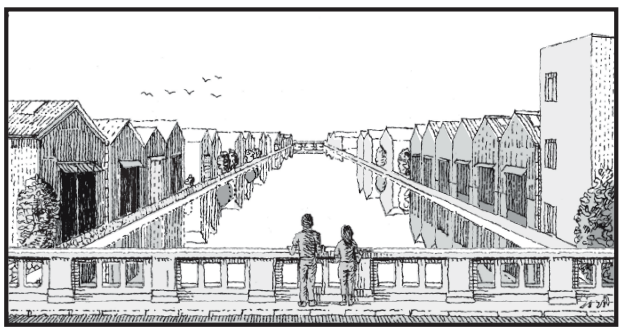


❷松重閘門と土地のかたち

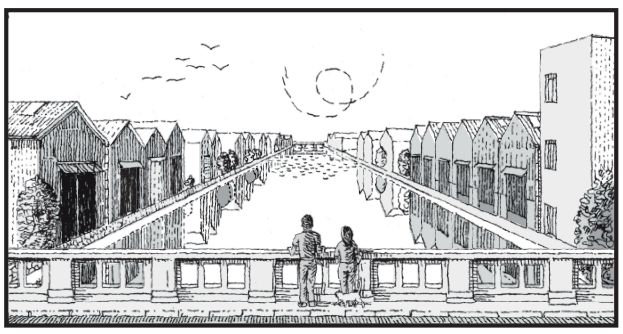


※図をわかりやすくするために、中川運河と堀川の水位差など、実際よりも強調している箇所があります。

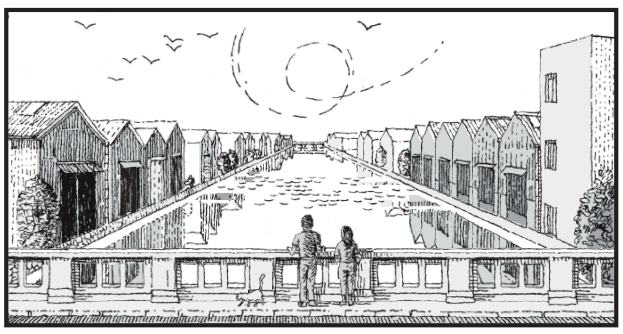
❸空気の変化を映し出す水面



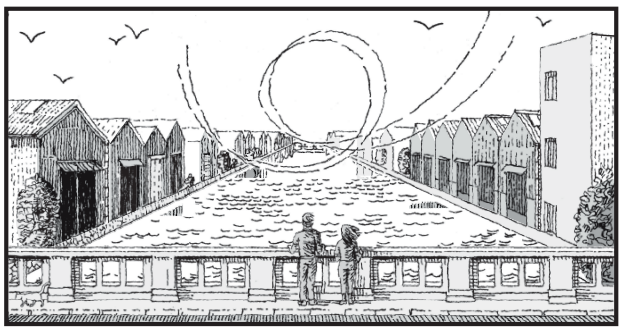
両端を閘門で仕切られた中川運河は、陸から海へ向かう流れがない水槽のような構造になっています。足元近くに静かに佇む運河の水面には、しばしば両岸の風景が180度反転して映ります。建物が水面の際に建っていることも、鏡像を引き立てる大きな要因です。



街中では、ビル風に煽られることはあっても、気持ちのよい風の流れを感じることはめったにありません。中川運河は、名古屋の貴重な風の通り道です。橋の上に立って運河の水面をじっと眺めていると、遠くの方から風がそよいでくる様子を見ることができます。



すると、風の流れとともに水面に鱗状のさざ波が立ち、今まで綺麗に写っていた鏡像がみるみる掻き消されていきます。空気の流れが水面の状態に反映される中川運河は、土木が生んだ水と空気の邂逅の空間と言ってもよいでしょう。



中川運河には、朝陽、夕陽、月や空に浮かぶ雲の一つひとつが映ります。静寂さゆえに、鳥が飛来しては去る様子、あるいは雨が降っては止む瞬間もよくわかります。中川運河の水面は、環境に生じるあらゆる刺激に反応しながら、たえず変化しつづけているのです。